大光電機、2015年度売上高18億円増の400億でＬＥＤ化率94％
東大阪で建設の技術開発センター施工は大林組

照明専業メーカーの大光電機は、2015 年度の事業全体の売上高が前年度より 18 億円増の 400 億円となった。同社は戸建て住宅や店舗向け照明の製造販売を、間接照明など得意とする分野の事業展開に 2016 年度も注力していき、同年度の事業全体の売上高は 415 億円を目指す。東大阪市では 20 億円を投じ技術開発センターの建設も進めている。

前芝辰二氏

400億円のうちＬＥＤ照明の製造販売事業の売上高が占める割合は94％程度。同社が注力する住宅や店舗市場で、ダウンライトや間接照明などの各種ＬＥＤ照明製品などの取組に注力し、2016年度は事業全体で415億円の売上を目標に掲げる。このうちＬＥＤ照明事業の売上高は全体に占める割合のうち96％程度になると見込んでいる。

オフィスや工場、店舗、住宅など様々な用途向けの照明がある中で、大光電機は戸建て住宅や店舗向け製品の販売に注力し、戸建て住宅と店舗向け製品の売上高はそれぞれ５割程度を占める。

ノウハウ要求される各分野担当のデザイナー

最近新たに販売を開始した製品として2016年１月に2700Ｋ、3500Ｋ、5000Ｋの３色に変えられる住宅向けＬＥＤダウンライトを製品化したほか、さらにサイズを小型にした間接照明などの製品も今後販売を行っていく。また商品の開発に加えて、５月18日の東京会場での開催を皮切りに、７月８日にかけて全国７カ所で製品展示会を開催する。「照明逆引き辞典」と題した展示会のほか、同社の照明デザイナーであるスタッフによる講演などが行われる。同社は間接照明や吹き抜け空間の照明などを得意分野の１つとしている。このうち子ども部屋や廊下、トイレなどと異なり、物件ごとに高さや広さなどが多様な吹き抜け空間での照明は設計が難しいと大光電機は指摘する。同社の前芝辰二代表取締役社長は、「自社のデザイナーによる本の出版などの取組みによって、大光電機が持つソフトの力をここ数年マーケットに定着させてきた」と、ノウハウが求められる吹き抜けや間接照明といった分野での同社の位置づけを語る。展示会では吹き抜け空間の照明を担当するスタッフによる講演も行われる。

大光電機のダウンライト（画像は同社ＨＰより）

ＬＥＤからＬＥＤへの置き換え

ＬＥＤ照明では開発当初に比べて販売価格が下落し、メーカーの事業採算性が厳しくなっているとの指摘がある。こうした動向などを大光電機はどう見ているか。「メーカー各社の取組みで個々の商品の値下げは引き続き行われているものの、現在業界全体としてＬＥＤ照明製品の価格下落が続いているという傾向にはない。また当初取り付けられたＬＥＤ照明器具で、形状・デザインがインテリアに合っていないものや、光源の色が不自然などの理由から新たに販売されたＬＥＤ照明への置き換えを図るケースが見られる」（前芝氏）。

20 億投じ技術開発センター建設

大光電機では現在東大阪市で技術開発センターの建設も進めている。同社が保有する物流センターの解体後同敷地内で建設を行い、新たな技術開発センターの新設と物流施設の集約を図る。技術開発センターの建設に総額20億円を投じる。技術開発センターは、2016年２月より着工しており2017年２月頃の完成を想定している。延床面積約1,400㎡の２階建ての施設内に、検査機器などを設置するとともに、商品開発や品質保証部門の担当スタッフも配置する。技術開発センターの施工は大林組が担当する。